

## 佐藤次高編『イスラームの歴史1 イスラームの創始と展開』（宗教の世界史11）山川出版社2010年

本書は、山川出版社のシリーズ「宗教の世界史」の第11巻目として出版された、イスラームについての概説書である。同社は「世界宗教史叢書」として『イスラム教史』（嶋田襄平著1978年）を世に送り出しているが、今回イスラームについては2巻本（第12巻目が『イスラームの歴史2 イスラームの拡大と変容』として出版されている）の構成をとり、分量・内容と共に充実させている。この40年強の間に我が国におけるイスラーム理解の重要性と需要の高まりを反映しているものと考えてよいだろう。また前作は嶋田襄平氏が一人で執筆したものであったのに対し、今回のものは専門性を重視して数名の研究者による共著となっている点を強調しておかねばならない。以下では各章の内容を紹介しつつ、適宜評者の意見や感想を述べていくことにする。

序章「イスラームの過去・現在・未来」は、編者である佐藤次高氏が担当する。「知と文明の創出」という小見出しで始まる本章は、まずイスラーム文明が先行文明の「知」を熱心に獲得しようとしていたことを指摘し、高度な学問体系や都市文明が存在したことを述べる。そして、「近代」との出会いでは、イスラーム世界が直面した危機的状況とその打開に向けた試み、そしてその試みが十分に達せられていないことを指摘する。さらに未来に向けての試練では、近代以降の様々なイスラーム改革運動の存在を指摘し、今後の展開を見守ることの重要性を説いている。最後に、2巻にわたる『イスラームの歴史』の概要を提示して本章を終えている。本章はまさに編者によるイスラーム概観であり、2巻にわたる『イスラームの歴史』の内容の見取り図を示したものであるとも言ってもよいだろう。

第1章「世界史を変えるイスラーム」も引き続き佐藤次高氏が担当する。本章は表題の通り、イスラームの世界史上位置づけを示そうとするものであり、イスラームの誕生、イスラーム社会の形成、そしてイスラーム文明の形成と拡大という観点から述べられている。全体としては第2章以降の内容を総括し、大枠を示すとともにそれらの諸前提が提示されているという印象であるが、若干気になるのは、イスラームの宗教的特徴についての記述が少なく、また六信五行等の信仰に関する記述が各所にちりばめられる形で示されており、体系的ではない点である。これはイスラームの社会的意義や役割を重視した記述故と思われるが、その分教義の説明などについて物足りなさを感じる。

第2章「ムハンマドの生涯とイスラーム」は、後藤明氏が担当している。本章前半はムハンマドの生涯を中心とし、後半はムハンマド死後の信徒集団による国家形成についての詳細が述べられる。特に前半の傾向として、アラブ民族あるいはクライシュ族に、中心的な役割を果たす「長」の存在がなかったという記述が目立つが、これこそ後藤氏の数十年来一貫した主張として明記されるべきものである。また後半ではアラブの大征服に絡めて、アラビア半島各地から集結したアラブ遊牧民の仲間意識の形成にイスラームという信仰が多大な役割を果たした点が強調されている。第2章の特徴としては、嶋田氏の前作と比べてもやはりイスラームの教義や信仰面での記述は少なく、その分前章と同様にイスラームの歴史的、社会的側面が重視された記述となっていることであろう。

第3章「生活の指針シャリーア」は堀井聡江氏が担当している。イスラーム法と法学を扱うこの章の存在こそが、本書の価値を大いに高めているものと評者は考える。まず、シャリーア（イスラーム法）とフィクフ（法学）の概要が述べられ、基本事項を確認している。ここで重要なのはシャリーアが不文法であるという指摘と、成文法（制定法）中心の法の理解は見直されるべきと述べている点である。

次に堀井氏は法学の誕生とその発展の歴史的経緯について述べ、初期の法学が伝承主義に傾いていく傾向を明らかにする。また法学理論の形成との関係に限定しているが、イスラーム神学の理論の紹介もなされている。この部分、本書を通じて唯一神学の内容に触れる部分として注目に値する部分である。ただし、ムータズィラ派公認についての評価を「時のカリフが法学者になり代わり宗教的問題に口を出したかっただけ」であり、「そのためムータズィラ派の説は大衆的な支持を得られず、カリフの威信が傷つきそうになると、公認は取り消された」としているが、これは単純化に過ぎよう。事はそう単純ではなく、宗教に関する事柄におけるカリフの権限強化、あるいはカリフの権威の絶対化と絡めて論じる問題であるので、カリフが思いつきで行動していたかの如く語るの誤りであろう。

第3章後半では、シャリーアの完成とスンナ派四大法学派成立の経緯と特徴、そしてシャリーアの適用の具体例としてオスマン朝期の事例を紹介している。ただ本章最後の部分で、イジュティハードの所産として、脱法行為もまたシャリーアを成り立たせる要素としている点には、少し違和感を覚えた。「脱法行為」がシャリーアを現実の状況に適合させようとする上での行為とはいえ、やはり譲れない部分、越えられない部分もあろう。その点も強調すべきではないかと感じた。

第4章「スンナ派とシーア派の活動」は、再び佐藤氏が担当する。本章では、現在のイスラームの二大宗派であるスンナ派とシーア派の形成、そしてその発展が述べられている。前半では、両派の成立の経緯が示され、続いてスンナ派共同体の長であるカリフについての政治理論の概要と「神のカリフ」観念についての考察がなされる。そしてシーア派についても同様にイマーム論の概要、加えてシーア派内の過激思想派閥の特徴が示される。一方後半では、シーア派国家、スンナ派国家としてそれぞれの宗派を奉じて国家運営を行った諸王朝の政治史や特色が示されている。

やはり国家と宗派の関連での記述が大半を占めるため、両派の信仰や法体系、神学議論などの差異についての記述はなされていない。もう少し両派の思想的な違いを鮮明にする内容が欲しいところである。

第5章「スーフイズムの成立と発展」は東長靖氏が担当している。本書のもう一つの売りがこの第5章である。担当の東長氏は日本におけるスーフイズム（タサウフという表現を用いていないのは編集方針故であろうか）研究の第一人者であり、彼によるまとまった形での、初めての「スーフイズム概説」が本章において示されているためである。その内容はスーフイズムの成立やイスラーム思想全体におけるスーフイズムの位置付け、そしてスーフイズム思想の根幹や思想発展の経緯、またスーフイズム普及の役割を担ったタリーカの問題などが可不足なく、分かりやすく描かれており、入門として最適なものとなっている。

また興味深いのは、従来のイスラーム研究で取り上げられてきた「スーフイー対ウラマー」という構図は限定された地域と時期においてのみ合致するものと理解すべきであるという見解およびそれを裏付ける考察である。特に反スーフイズムの急先鋒であるイブン・タイミーヤ（1328年没）の影響力は、当時においては殆ど存在せず、近代以降になってその反スーフイズムの思想が再評価されたという説明は大いに頷首できた。

しかし若干不足を感じた点もある。スーフイズムを「深遠な形而上学から怪しげな民間信仰まで幅広い領域に関わる現象」とし、スーフイーを「叡智を持つ哲学者、奇跡を起こすありがたい存在、「山法師」の如き政治的圧力団体の成員、「乞食坊主」的ならず者」まで様々な存在であるとしていたが、「怪しげな民間信仰」としてのスーフイズムや「政治的圧力団体の成員やならず者」としてのスーフイーについての言及は殆どなかった。スーフイー、スーフイズムのこの側面についての研

究の進展を期待したいところである。

第6章「イスラーム世界の拡大と深化」は堀川徹氏が担当している。本章では、イスラームの信仰が世界各地に広がり、定着した要因を、トルコ民族の征服活動、ウラマーや商人の移動、そしてスーフイズムの活動の三点に集約し、説明している。アラブの大征服はアンダルスから中央アジアまで達したが、トルコはこれをアナトリアやアフガニスタン、インドへと広げ、イスラームの領域拡大に多大な貢献を行った。また11世紀以降イスラーム世界の大半の地域ではトルコ系の君主が政治権力を握り、軍事を司るなど、トルコのイスラーム世界における役割の高さが指摘される。またウラマーやムスリム商人の学問あるいは利益追求のための移動はやはりイスラームの信仰の定着や拡大に大きな役割を果たし、スーフイズムやタリーカはイスラーム受容以前に有していた各種の信仰を、イスラームの文脈に読み替えて、それを保証したとして、やはりイスラーム定着に大きく貢献したとする。本章の内容は、それまでの章でなされた議論を踏まえたものになっており、本書の総括的な位置付けとして、すんなりと理解することができた。

以上、各章の概要を示し、所々評者の疑問点を述べてきた。これを踏まえて、以下では本書の内容について、評者の思うところを述べることにする。本書は嶋田氏の前作に比して、シャリーアとスーフイズムの概説に大きく頁を割いた点、また前作が歴史学者一人による執筆であったのに対し、本書は3人の歴史学者に加え、法学と思想の専門家を擁した執筆陣による点が大きな特徴として挙げられる。これにより、より広範な視点から高い専門性を有した内容を提供することが可能となったからである。特にスーフイズムに関しては、評者の怠慢であるという誹りを甘んじて受けるにしても、はじめて体系的にスーフイズムを学べた、というのが正直な読後感である。また法学についても、その成立と発展の経緯が政治史や神学理論の発展と絡めて説明されており、前作よりもはるかに分かりやすい内容であった。また、この「宗教の世界史」シリーズの方針が、単なる宗教の通史ではなく社会とのかかわりを重視した内容を提示する、というものであることから、本書を通じて、国家や共同体あるいは社会との関係でイスラームの歴史が概観されているが、これも方針に沿ったものとして成功しており、また共著であるにも拘わらず、全体の統一性もとれているといえるだろう。

ただし、若干気になる点もある。まず、シーア派に関する記述が少ない点である。本書では第4章の2-3節において、シーア派の信仰や教義、あるいはシーア派国家の概要がまとまった形で述べられているが、第3章ではコラムにおいてのみシーア派の法学が扱われ、第5章でも神秘主義哲学のシーア派との結び付きの項で触れられるのみである。また書評の対象ではないが『イスラームの歴史2』ではシーア派に関する記述はほぼ皆無であり、このシリーズでのシーア派軽視は明らかであると言えよう。

ムスリム総人口の1割程度とされ、少数派であるシーア派ではあるが、イラン・イスラーム共和国の存在、あるいはイラク南部やレバノンのシーア派の活動など、現代中東政治を考える上でもシーア派の重要性は高いと思われる。18-19世紀辺りで巻を区切っている関係上、本書でのシーア派の記述に、その現代的意味にまで言及することは望むべくもないが、この点改善の余地があるように思う。

次に、国家や社会との関わりを重視するあまり、信仰や教義、その他思想面での記述が少ないことにも不満が残る。既に第1章のところで指摘したが、根本教義とされるタウヒード（神の唯一性の表明）と六信五行の信仰対象や信仰行為についての説明がまとまった形では示されておらず、しかも随所で行われる説明も簡便なものである。だが宗教の歴史としてイスラームを取り上げる以

上、例えば六信五行がムスリムの信仰の対象や行為となっていく経緯についての説明がなされるべきだったのではないだろうか。

また神学、そして哲学などイスラーム思想上の重要な分野に対して頁が割かれていない。尤もこの点は既刊である『ユダヤ教の歴史』や『キリスト教の歴史1、2』も同様の傾向であるので、シリーズの方針の問題であるかもしれない。しかし、特に神学はムスリムの信仰の問題を扱い、世界観や他宗教観など、現実の社会に関わる分野であると思われるので、この点もう少し体系的な記述が欲しかった。なお蛇足ながら、巻末の附録は質・量ともに充実しており、特に歳時暦の項は必読である。

以上、充実した内容を有する本書に対して、わずかな瑕疵に難癖をつけ、雑駁な感想を述べてきたが、本書の内容が最新の研究や長い学究に裏打ちされたものであることに変わりなく、最新のイスラーム概説として一読に値する書物であることを最後に強調し、擱筆する。

(橋爪 烈 日本学術振興会特別研究員 (PD))

## 小杉泰編『イスラームの歴史2 イスラームの拡大と変容』山川出版社、2010年

山川出版社の「宗教の世界史シリーズ」全12巻の1冊である。このうちイスラームには2巻が割り当てられており、『イスラームの歴史1 イスラームの創始と展開』（佐藤次高編）に続き、近現代を扱う巻となっている。

キリスト教やヒンドゥー教も含む本シリーズは、「人びとの生活に息づく信仰に踏み込み、地域的な広がりにも着目する」と謳っている。実際、この巻は、限られた紙数の中で、人間生活の多様な領域や地域性のバランスをうまくとって構成されている。計6名による分担執筆だが、1冊のまとまった読み物として仕上げられており、イスラーム世界の動向に関心をもつ読者に推薦したい。近年のイスラーム地域研究の成果もふんだんに盛り込まれており、イスラームの研究者もこの本を通読することで、自らの作業をイスラーム研究全体の中で再確認できるだろう。

まず、巻頭のカラー写真が目を引く。新生児の命名式（パキスタン系イギリス人）、割礼祝いの正装をした兄弟（イスタンブール）、金曜礼拝の説教を聞く信徒たち（中国青海省）、モスクの文様を修復する工芸家（イェルサレム）、女性ガンサーたち（マスカット）などなど。カバー裏にも色鮮やかな衣装をまとったアフリカ系の女性たちが配されている。多種多様なムスリムの生活を活写したもののだが、「このような写真は初めて見る」という読者も多いことだろう。筆者が特に気に入った一枚は、マレーシアの女子高生たちである。ランの花柄をあしらった制服と、キャプションとして附された「3人の娘を育て上げた親は楽園に入る」とのハディース（預言者言行録）がことのほか印象的である。イスラームと聞くと、紛争や対立、女性への抑圧を連想してしまう私たちの固定観念をゆさぶる仕掛けとして、巻頭の写真が配されているのだろう。最初に同時代を生きるムスリムたちの写真をじっくり見ることで、彼らの歩んできた近現代史を読み解いていくことへの期待が増幅される。

本文目次を見ていきたい。

- 第1章 近代と邂逅するイスラーム（小杉泰）
- 第2章 イスラームの再構築（小杉泰）
- 第3章 スーフィー教団の革新と再生（東長靖）